



# 染彩



芝木好子



染 彩

©一九六七

昭和四十二年十二月五月初版  
昭和五十二年四月二十日再版

著 者 芝木好子

発行者 高梨 茂

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一―九

振替東京二―三四

検印廃止

染<sup>せん</sup>

彩<sup>さい</sup>



## 染 彩

花の季節は夕暮になると風が立った。まわりが畑で、うしろに小さな雑木林のある葉子の家は、西武電車の沿線の鷺宮の外れであった。まだ団地なども出来ない前の、どこか武蔵野のおもかげを宿した土地である。風の吹きぬけが強いのと、家がやわなのとで、隙間風もかなり入ってくる。日が暮れると、戸障子が鳴った。

庭に張り出した細長い仕事場に立つ松浦典夫のために、葉子は早目に灯をつけに立った。細い板台で型付をしている彼の一区切りしたところで、スイッチを入れる。仕事場の土間を板張りにすることが、葉子のこの二三年来のねがいたが、まだ実現しなかった。典夫はサンダル履きで、細長い板台へ一筋に伸ばした真白い縮緬ちぢめんに、型紙をのせていた。週に二日アルバイトに

くる学生で、おもに型付をしている。この仕事は思いのほかの重労働で、手間がかかった。週刊誌ほどの大きさの型紙を布地にのせて、型糊をへらでつけてゆく。型紙は継目を合せて進んでゆき、型紙の柄の空間は糊で塞がれてゆく。体をかがめて、縮緬<sup>ちりめん</sup>地にびっちり型紙を合せてゆくのは、技術が要った。それに途中でやめるわけにゆかなかった。始めたら一反終るまでしてしまわなければならない。翌日に廻すと、糊の加減がちがうからであった。典夫は仕上げるまで脇目もふらなかった。

今日の絵柄はどくだみであった。この毒々しい名前とは似ない白い花は、庭の隅の湿っぽいところや、雑草のなかにまぎれて咲いている。四枚の白い花卉は不揃いで、絵柄もそこがおもしろかった。この模様の色は、典夫にはまだ解らない。仕事場のわきの座敷で葉子は別の柄の色差しをしていた。机に反物をのせて、筆で色を差しながら繰ってゆく。一色はやはり一氣に描かなければ、色の上りが揃わないので、夜半までかかることはさらであった。仕事の間、言葉も交さず、単調な作業に打ち込んでいると、風の唸る音がした。

まだ典夫の手伝いにくる前は、型付も葉子の仕事であった。染めは、なんといっても絵柄を生み出すのが第一で、写生した絵や、デッサンや、着物の雛形にのせた絵などを、仕事部屋の壁に貼りつけて、新しい柄を雰囲気から纏めてゆくのだった。やっと出来た下絵を型紙に写し

て、小刀で彫ってゆくのも彼女の仕事であった。この作業は面倒でもたのしみがあった。こうした下準備に、人より時間がかかるのは、馴れないからであろう。数年前まで彼女は油絵を描いていた。

西武電車の駅から二十分も歩かなければならない不便なこの工房へ、松浦典夫が尋ねてきたのは半年あまり前の秋であった。その年の国華展の染色工芸部門に、彼女は壁掛を出品した。大幅の麻布にむら雲と鳥の絵であった。紺地のむら雲に白鳥と黒鳥とがいて、黒鳥は翼をひろげ、牙を剥いていた。その絵のことを典夫はT美大の機関紙に書くよう、葉子へ依頼にきた学生であった。彼女は固辞した。国華展の油絵から染色にかわって、経験が浅かった。断わられた典夫は、つぎ穂がなくて、煙草を取り出した。

「一本ください」

と葉子は無心して、火を点けたが、吸いながら噎むせた。

「鹹かいのね」

「初めてですか」

「前から吸ってみたいと思っていたの」

典夫の手付を眺めたが、これも上手とはいえなかった。



「僕も一週間目です」

「あなた、未成年じゃないの」

「大学三年ですよ、おどろいたな」

心外そうな青年の顔は髪も眉も濃く、眉は一字にきつそうで意志的にみえたが、口許や眉などは初々しくて、匂いそうな若さであった。中学一年生の宏を大きくしたような、と葉子は眺めた。煙草をおぼつかなく吸った典夫は、灰皿に捨てたあと、家の中や仕事場を見廻した。猛々しい黒鳥を描いた木谷葉子を、ズボン姿に断髪の女性と想像していたので、少しおかしかった。染色工芸には華麗さや繊細さがあふれて、それ自体優美なものを保っているのが常であったが、黒鳥と女名との取り合せに別の興味があつたのである。この小さな工房は貧弱だが、仕事部屋の壁に鋳止めてある下絵の数々は日夜彼女を取り巻く世界として、雰囲気にあふれている。黒鳥はこのあたりへくる野鳥かと彼は訊いた。

国華展の度に葉子はぎりぎりまで主題が決まらず、追い詰められる。結局最後の週間ほどで絞り出した絵柄を、夢中で仕上げてゆくのだった。黒鳥と白鳥は見る人がさまざまに意味づけてくれるが、彼女自身は混沌としていた。黒鳥の鋭い眼や尖った爪は自分かもしれない。会場で一瞥した時、厭な気がして、近寄りたくなかった。その染色について書くとしたら、勿体

らしいことを言つて、ある感情を隠蔽しなければならない気がする。

「染めの工程を一人するのは、重労働ですね」

典夫は木谷葉子の生活を感じた。

「女では限界があるのね。たのしいのは下絵の決まる前後だけ。辛いのは型付です」

人を傭うゆとりはないから、糊を煮るのも、色止めの具を作るのも自分だと彼女は言った。

典夫は黙って聞いていた。

二度目に彼が尋ねたのは、冬の初めで、人家の切れた畑や空地を入れてゆくと、雑木林の近くに二、三軒ちらばった家の一つが木谷工房で、遠くから庭先に伸子張りした染めものの横長く伸びているのが見えた。天日の下に洗われた布が干されているのは、彼の眼に親しかった。近づく、ほっそりした女主人が琉球絣の上っ張りを着て、白粉気のない顔で立っていた。髪をきつく束ねているので、小さな顔の輪郭はむきだしであった。

「いらっしやい」

と葉子は言った。大根畑を近づいてくる訪問者を待つのは、期待があった。人里離れているせいか、人の訪れがうれしかった。戸外で見ると、学生服の青年の脚は真直に伸びている。

「御精が出ますね」

彼は言った。葉子は殊勝な挨拶をする若者がおかしかった。商人の交す言葉を言っている。

「見てごらんなさい」

彼女は前方を差し、典夫は振り返った。畑の先の街道を越えた高い空に、白い富士が見えた。雲の中に端麗な山容をのぞかせている。

「朝か夕方しか見えない富士が、今日はよく晴れて見えること」

この家へくるひとに御馳走のつもりだと彼女は言った。浮世離れのした場所は、あるかなしの傾斜の台地にあった。伸子の張りものは風のない日を選ばなければ、火山灰とおぼしい砂埃が立って、染めた布をだいなしにするのであった。そんな日は掃いても掃いても座敷は薄埃で、仕事にならなかった。その代り冬の陽だまりの櫟林は佳い、と彼女は自慢した。

仕事場には長い板台にまっさらな縮緬が張ってあった。今日一日で型付をしなければならぬ手筈になっていた。典夫は板台を横目に見ながら、案内された座敷でこの前訊ねられた小袖の画集を出した。この座敷は縁先から陽は差したが、火桶一つしか用意してなかった。暖房は仕事場の土間も同じようであった。それでいて細身の葉子は寒そうにしなかった。小袖の画集は色刷りの頁があって、豪華なものであった。小袖とは着物のことをいうとも記してあった。衣裳は江戸期のものが多く、能衣裳などもあって、由緒ある華美な柄が目を奪うばかりであっ

た。

「佳いものを貸していただいたわ」

葉子は客に茶を出すのも忘れて、頁を繰った。染色家には参考になるものにちがいがなかった。しかし彼女は自分の創作をこういうものから得る気はなかった。

「滝川先生はいつもおっしゃるのよ。柄は自分の眼で捉えたものでなければいけないことをね。従来の江戸小紋や友禅や紅型びんがたから頂いたものは、創作とはいえないのね。だからまず発見することが染色家の仕事らしいわ」

「従来の染めや模様は、模様に触れませんか」

「それは、同じ蝶なら蝶、梅の花なら花に変わりはなくですよ。私の蝶は、やはり私だけの新鮮な蝶にならないとだめなのね」

小袖の中にも揚羽蝶はあったが、図案化したものであった。古典のきものは定着した絵柄が多かったが、中にはおどろくほど自在に、家あり、庭あり、橋あり、滝ありの衣裳もあった。また練りぎぬ地に紫陽花あじさい摺箔縫いの独創性に富んだ、目も綾な衣裳もあった。佳いものの豊かさはその時代にも珍重されている。典夫もともに眺めた。

「この紫陽花は花卉が縫いとりで、さまざまな色を使っていますね。繊細な神経だな。それで

いて全体は渋くて、しかも豪華ですね」

「袖は元禄ね」

「これだけの芸術品を、衣裳に残するのが不思議ですね。それ以外発達しなかったのかな」

典夫はそう言った。

「きものは誰のものでもない、自分のものだからいいわ。簞笥に藏われたおかげで、二百年も保存に堪えたのでしょう」

「女はきものに執着しますからね」

葉子と話していると、女性のもつ世俗の匂いに遠い気がした。彼が葉子の息子<sup>の</sup>宏を見たのも、この日が最初であった。外から帰ってきた男の子は、風に飛ばされたように入ってきたが、軀よりいくらか大きい服を着て、それがひょろりと痩せた愛らしい子なので、不似合で、愛嬌があった。

「お帰り、あったの？」

「うん」

男の子は母に似た黒く光る眼をいきいきさせて、ズックの袋を持ち上げた。石を集めるのが好きなのだ、と葉子は典夫に説明した。宏はズックの中の石を取り出すのをためらって、含羞<sup>はにか</sup>

んでいる。採集してきた石は洗ったり磨いたりしなければならなかった。彼の勉強部屋は本棚や机の上に、さまざまな石が模型飛行機の代りに飾ってある、と葉子は言った。小さいのは指輪の玉ほどのから、大きいのは大人の拳以上もあると話した。やがて男の子は大切な石を抱えてきて、典夫に見せた。黒くて光沢のある石を置くと、石は岩になって、上から下の斜面へ細い窪みが流れている。

「白糸の滝」

と宏は言った。なるほどそれはやさしい滝に見えた。細い線は自然についた石傷としても、幾万の石塊の中から一つを探り当てて、滝に見立てるのはおもしろかった。

次の三角に尖った石を前に置くと、宏は服の端で石の表を磨いた。三角の石のそれぞれの面は、他の角度とほどよい釣合を保って、ゆるやかな傾斜を描いていた。

「これは？」

「スイスのマッター・ホーン」

少年は誇らしげに山の名を告げた。小石はたちまち著名な山に変身するのであった。典夫は微笑した。

「どこへ探しに行くの」

「多摩川なんか」

「お弁当持って、袋を担いでゆくからね」

葉子は息子の顔をのぞいた。学校から遠足にゆく時も、かならず石がお土産で、石の標本のせられた。石は日記の代りで、いつも石のあった情景が浮ぶのであろう。鴨川石、高尾石といったように、名を与えられて、形のよい石や、艶のある石があった。ある時学校から千葉の海へ潮干狩にいった、貝を拾う代りに石ばかり拾ってきた話を葉子はした。石の名所の昇仙峡へ行った時は、色美しい石に魅せられて探すうち遠足の仲間からそれで、危うく取り残されかけたこともあった。

「その時の石、見せてよ」

「うん」

宏は典夫の頼みを聞いて、自室から持ってきた。薄青い石は水盤の中におかれて、小砂利とともに溪谷を形どっていた。青い石は白い筋を幾条もつけて、優美であった。宏は霧吹きをもってきて、石を濡らした。青磁の肌はみるまに濃く深い翡翠色に染められた。染色家の息子だけのことはある、典夫は石を慈しむ子の手許を眺めた。

「誰に教わったの」

「教わらないよ。この間本を買ってもらったけど」

葉子の父は庭石を愛していたから、その遺伝だろうかと彼女は言った。子供は石塊を通して自然に触れ、美にも触れ、冒険もし、探究もし、少年の生活を充たしていることを思わせた。

しばらくすると、宏は葉子の作った食パンの一片と一片の間にハムとサラダ菜をはさんだ大きなサンドイッチを、耳つきのまま齧りはじめた。その御馳走は典夫にも美味であった。葉子は板台を振り返った。朝から型付をしなければならないのに、それはまだ放置されたままであった。この家が二人きりだということを、典夫はしぜんに納得していた。

「型おきを手伝ってあげましょうか」

彼はさっきから思っていたことを、口にした。

「あら、T美大は型付を教えるんですか」

「僕のうち、染めもの屋です」

典夫の眼許が赭らむのを葉子は見た。思いがけなかったので、なお眼を当てていた。彼の家は葛飾の、綾瀬川の近くにあった。昔の染めもの屋は川の流れに沿ってあった。綾瀬川も数年前までは染め上りの水洗いに使われたが、今は川洗いをする染めもの屋は無くなっている。彼



の家は江戸小紋であった。父は亡くなって、兄の代である。型付は宏の年ごろから手伝わされた。

葉子の型紙はどこか素人彫りで稚拙であり、柄ゆきも変っている。仕事場に下りた典夫は葉子の型付を見てから、代った。女の手と男の手は少し違う。女の方が細心というのでもない。彼のおきかたは、きびきびしている。縮緬地に渋紙色の型紙が密着するまでは神経質で、糊付けのへらは素早く巧みに動いた。さっと型紙が剝がれると、次の動作に移ってゆく。途中で逡巡や不安がなく、明るい速度を保っていた。

「巧いわ」

葉子は感嘆した。熟練した技術を見ると、幾年してもたまた自分の手がおかしくなってくる。典夫は仕事にかかると無言で、今までの学生っぽい姿が、染め工にみえてきた。一、二時間続けざまに付けてゆき、一区切りすると、腰を伸ばして、ふうっと息を吐いた。久しぶりなので、思ったよりはかがゆかないし、腰も痛かった。

「父が生きていた頃はやらされたけど、今はしないから駄目ですんねえ」

汗ばんで、若々しい額や首筋が湯気でも立てそうであった。染色を学んでいる学生という以上の、仲間意識を葉子は感じた。二時間も型をつけてくれたのを、なんといつてよいかわから